

右脳とEmpathyと通訳

Daniel H. Pink (2005). *A Whole New Mind*

近藤正臣

はじめに

左脳は言語脳、右脳は音楽脳とも言われていて、通訳作業も言語活動だから、通訳をしているときには左脳が主として働いているのだらうと、これまではなんとなく思いこんでいた。ところがどうもそうではなさそうだと思い始めた。Daniel H. Pink, *A Whole New Mind* (New York: Penguin Group, 2005)¹を読んでいてのことである。最近、アメリカの友人が送ってきてくれて読んでいる。とてもおもしろい本であるが、通訳に関連するところだけを紹介させていただき、すこしく疑義をも提起したい。一部、即席の訳語をつくるよりも元の英語をそのまま残すほうが誤解がないと思い、読みづらくなっていることを了解されたい。なお、本書は20版を重ねているロング・セラーであり、多くの神経学者・心理学者の業績を引いている。決して際物的な書きものとは思えない。

本書のテーマ全体は、とても大きい。先進国ではこれまで農業時代、産業時代、情報時代を経てきたが、今や Conceptual Age に入っている、そこでは routine になっている作業はほとんどがアジアに外注されるので、今や、先進国国内で時代の寵児になるのは、いわゆるIT技術を駆使する knowledge workers と言われた弁護士とか医者ではなくて、Design (デザイン)、Story (物語)、Symphony (交響曲=全体との調和)、Empathy (他者との共感、感情移入)、Play (遊び心)、Meaning (人生の意味)を重視する志向性をもった者だということであって、経済・社会全体の大きな動きについて論じたものである。情報時代とは、かつてAlvin Toffler が「第3の波」だと論じた時代のことだから、今や、次の「第4の波」の時代の真ただ中にあるということになり、それが説得的に論じられている。しかもそれを、右脳と左脳の機能から論じていて、今は左脳で logic に優れているだけでは不十分だ、右脳の働きとのバランスをとらなくてはならない、と論じているのである。

High Concept は、'the ability to create artistic emotion beauty, to detect patterns and opportunities, to craft a satisfying narrative, and combine seemingly unrelated ideas into a novel invention' (Pink, pp. 51-52)と関係する。High Touchは、'the ability to empathize, to understand the subtleties of human interaction, to find joy in one's self and to elicit it in other, and to stretch beyond the quotidian, in pursuit of purpose and meaning' (Pink, p. 52) に関わる。美しいものを創り、パターン・機会を発見し、(単なる情報でなく)物語を創りだし、無関係にしか見えないものを合わせて新しい発明品を創ること、そして、他人に共感し、複雑・微妙な人と人との触れ合いを理解し、日常のありふれたことから離れて、人生の意味を見出そうとするようなセンスのことだと言えようか。

¹ 本エッセイを書きあげてから、「ひょっとしたら」と思ってインターネットで検索したら、やはり邦訳が出ていた。ダニエル・ピンク著、大前研一訳『ハイコンセプト』(三笠書房)となっている。

これまでもこの問題は論じられていて、日本語を話す人は、6歳のころに左脳と右脳との機能分離の仕方が他の言語(たとえば英語)を母語として育つ人とはすでに違っているというというのが角田忠信『日本人の脳』の言うところであった。ここでは、その左脳と右脳の働きについて英語を母語とするものの観点から論じられている。またそれが、通訳に大いに関連すると読むことができたので、これを報告したい。

1 右脳と左脳

まず著者は右脳・左脳について一般論を述べる。左脳は言語脳とも言われ、ものごとをひとつひとつ順番に論じ、逐次的にものごとを分析し、そして言語を司るとされる。それに対して、右脳は、ものごとを全体として一括して論じ、パターンを認識し、感情・非言語的な表現を解釈するものとされている。さらにこれを言いなおして、「絵を描くのは右脳だ、問題は実は見ることだ、ほんとうにちゃんと見る上での秘訣は、くなんでも知っているといばっている左脳をちょっと静かにさせ、mellowな(甘くなめらかで、まろやかな)右脳が自分の仕事ができるようにしてやること>だ」と言う(Pink, p. 15)。もちろん、ある特定のときにどちらか片方の脳しか働いていないというのではなく、どちらが有力な働きをしているかの問題である。

著者はこのように一般的に述べた後、以下の4点がこの両脳の作用についての重要な論点であるとす

A. 左脳は体の右側を支配し、右脳は体の左側を支配している。右利きの人の場合、左脳がとても重要だということになる。私ごとで恐縮であるが、私のくも膜下出血は頭の右側で起きたので、後遺症が残るとすれば、左半身不随ということになると、家族は説明を受けていた。

おもしろく、後に意味があるのは、頭あるいは目をゆっくりと左に向けていくと、右脳がこの動きを支配するという、逆にこれをゆっくりと右に動かしていくときには左脳がこれを支配しているということ(Pink, p. 18)である。したがって、英語などのアルファベットを使った言語を読む場合には左脳が働いていることになる。こうなると、このような国では左脳が優位だとされ、このような脳は **the alphabetic mind**とも呼ばれる。

しかし、日本語は伝統的に上から下に書き、右の行から左の行に移って行くし、現在でも、新聞や書籍はその多くが上から下に、行は右から左に印刷されている。上から下に目が動く場合には、いったいどちらの脳が主として働くのであろうか。また、近年、とくにワードプロセサーやパソコンを使って日本語を書くことが多くなっている(私もいまはそうしているし、『通訳翻訳研究』もそのように印刷されている)のだが、これは左脳が支配しているということだとすると、パソコンの利用が多くなり、横書きの印刷物が多くなるにつれて、日本人の脳の使い方は変わってきているということであろうか。また、そのような転換はどのような意味をもつのであろうか。さらにおもしろいのは、毛筆で短歌を書くときには、字は上から下に書くが、同時に左から右に流れるようにつながっていく。これにはどのような意味がある(あるいはあった)のであろうか。手紙を毛筆で書くときにはこうはならないことにも何か意味があるのであろうか。

B. 左脳はsequentialであり(順番にものごとを処理していく)、右脳はsimultaneousであること(瞬時にものごとを処理する)。

たとえばこの文を読んでいるとき・言語を聴いているときは、入ってくるものを入ってくる順番に処理していく。順番に起きるできごとを理解することは、右脳より左脳の得意とするところであるから、言語活動では左脳のほうが活躍している。これに対して右脳は、いくつかのものごとを同時に(simultaneously)に処理する。三角や四角という図形の形を判別するときとか、ある状況のいろんな要因を一目してそこから解釈を下す。この意味では人間の脳は巨大なコンピューターより有能である。コンピューターがいくら速いと言っても、実は順番に仕事をしている。ある人の顔を見て、「あっ、お父さんだ」という判定を下すのは、幼児のほうが速い。

ここにすでに、通訳に関係していることがある。それは、逐次通訳で通訳ノートを読むのは、右脳であろうということである。たとえば、「ILOは1919年にできたものでありまして、実は世界最古の国際機関であります」という発言を逐次通訳するためにノートをとったとする。これを、

「ILOは1919年で、じ は世最古」

などとノートするであろうか。多分、この調子でノートをとっていきといたら、かなり時間をとってしまい、やがてかなり原発言から遅れてしまう。また、どうも意味はわからないがとにかく聴こえた単語を並べて書いていくということになってしまう(もちろんこれでは訳すときには役に立たない)。これはいわば(とても不十分な)速記を通訳ノートに使うというのと同じになってしまう、もちろん、速記は逐次通訳に使えないのは周知のことである。通訳する時には、このようにとったノートを順次見ていって、その意味を取って、それからそれを英語に直すというのでは、いわばましょくに合うまい。全体を瞬時に見とって、「ああ、そうだったな」とその意味を理解し、それを(日本語を経ずに)英語で表現していなくてはならない(専門用語になっている単語はそうではない)。

したがって、原発言が入ってくるのはsequentialであるが、これをノートするときには、それを見て瞬時にもとの発言の内容を思い出せるようなノートをとることが必要だし、そのようにノートをとっていかなくてはならない。これは、逐次通訳においては右脳的作用に大いに頼るということである。ただし、sequentialに入ってくる情報を瞬時に判読できる絵のようなものに転換していく際に脳がどう働いているのかは、当然ながら本書には言及がない。

C. 左脳はテキストを得意とする、あるいはそれに特化し、右脳はコンテキストを得意とする、あるいはそれに特化する。

著者はここでおもしろい例を出す。亭主が買い物をして、奥さまが料理の途中で、胡椒を買うのを亭主は忘れていたことに気がついたとする。奥方は「しょうがないわね」とつぶやいて自分で車のカギをとり、「ちよっとスーパーに行っていますからね！」と言って出て行ったとする。左脳はこのテキストを理解し、「ああ、あいつはスーパーに行くんだ」ということは理解する。しかし、このテキストは中立的なものではなかった。「あいつ、かんかんに怒っているな」ということを理解するのは、このことばのコンテキストを理解できる右脳の働きのおかげだというわけである。だから、この奥方の発言のimplicationまでを理解するには両脳が必要だということになる。

コンテキストを必要とするということは、通訳作業に関係しているどころか、どんな文章を理解するにも必須のことである。通訳作業においても同じで、まず原発言の理解において、それまでの発言内容(狭義のコンテキスト=文脈)に基づいてある発言を理解せざるをえないし、それ以前に、背景の知識が必須であるとする。後者も広義のコンテキストであり、発言をこの中において理解するのに右脳の参加が必要だとすれば、当然、そもそもすべての言語表現を理解するのに右脳は必須だということになる。

著者はさらにおもしろいことを指摘する。脳の一部を侵された人は文法・語彙はきちっとしているのだが、「彼らの言語は...普通ではない。prosody、つまりスピーチの音楽的要因を欠いているのである。音調が上下もしないし、速くなったり遅くなったりすることもない。声が大きくなったり小さくなったりもしない。感情や強調点が現れてこないのである。prosodyを欠いた話し言葉は、コンピューターで作った合成言語のように聴こえてしまう」(Pink, p. 21, quoting Chris McManus, 2002, *Right Hand Left Hand: The Origin in Brains, Bodies, Atoms and Cultures*, Harvard University Press, pp. 84-85)。

だから、左脳は<何を>言うかを支配しているが、それを<どう>言うかについては右脳の支配になると

も言う。これには、顔の表情・目の使い方も入るとされる。これは、それぞれをverbal と non-verbalとしてもいいかもしれない。

だとすれば、実際に声を出して発話して初めて任務が務まるのが通訳者であること、その折にprosody (韻律)は決定的に重要であることを考えると、通訳者にとって右脳はきわめて大切な役割を果たしていることになる。なにしろ、prosodyを与えてくれるのが右脳なのだから。

続いて本書は、おそらくコンテキストに関してはもっとも重要な論点をだす。それは、言語によってコンテキストに依存する度合いが違うという点である。まさに、high-context と low-context の文化・言語の違いである。著者はhigh-context の言語の例としてアラブ語、ヘブライ語の例をあげて、ここでは書くときに子音しか書かないという。たとえば、”stmp n th bg” に相当することを書く。これは、”stomp on the bug.”とも、”stamp in the bag.”ともとれる。読み手は、母音をコンテキストから自分で入れて、やっとならぬのがわかる。そしてこのような言語はたいてい、右から左に書いていくとする。これら言語を読む人は、目を右から左に動かしていくのだから、右脳を使っている。

著者はここで日本語の例を注に記している。日本語では、かなのほかに漢字もつかう。そして漢字は象形文字だから右脳で処理をしていることが、これまでの研究でもわかっているという (Pink, p. 249, endnote 11)。

こうなれば、上から下に読むときにはどちらの脳が支配的なのかはわからないとしても、漢字の使用を考えるだけで、日本人はそもそもその言語処理において右脳を多く使っていることになる。

さらに著者はメタファー(隠喩)を理解できるのは右脳のおかげだというのが、これまでの研究結果だという。例に挙げているのは、Jose has a heart the size of Montana. という文である。もちろん生理学的にそんな大きな心臓があるはずがないから、右脳がここに働いて、ホセは気持ちの大きい、愛すべき人物だという意味を理解できる。いうまでもなく、これは通訳作業においても必須の作業である。

D. 左脳は細部を分析し、右脳は部分をsynthesize (合成) して、全体像、the big picture を得る。

著者は、左脳のメタファーとしてfox、右脳のものとしてhedgehogをあげ、foxは「多くのことを知っている」、hedgehogは「大きなことをひとつだけ知っている」としている。これは情報の分析にこの両方が必要であり、通訳作業にもこれはあてはまる。

最後に著者は、健全な生活には右脳・左脳の両者が必要なことを強調する。これは当然であろう。「しかし、強力なメタファーとして考えれば、この両脳の対照は個人・組織が生きていく行き方を考える上でとても有用である」(Pink, p. 26)と続ける。左脳が勝っていて、論理・コンピューターのような思考をするのが得意な人もいて、弁護士、会計士、エンジニアなどになっている。逆に、右脳の機能の仕方である全体的思考・直感・非線形思考に優れていて、発明家、エンタテイナー、カウンセラー、アーティストなどになっている。だから、前者を左脳志向型、後者を右脳志向型と呼んで、思考形態・人生観を特徴づけることに意味があると論じ進み、これまでは左脳志向型が世界をリードしてきたが、これからの先進国ではむしろ右脳思考型がもてはやされるようになりつつあると論じ進むのである。

以上が、このエッセイの主たる関心事のおよそ半分である。つまり、通訳作業においては、少なくとも私がなんとなく思っていた以上に、右脳の機能が重要な意味をもっているということである。あるいは、通訳作業にはこの両者のバランスが決定的だと言ってもよい。

II 右脳とEmpathy

次に、右脳思考型の特徴のひとつとしてempathy（他者に対する共感）が挙げられている点について、触れたい。これは私が実ははっと驚いたことである。それは、小著『通訳者のしごと』（岩波書店、2009）のなかで、その第1章の扉のイラストに Empathize という単語をイラストレーターが選んでいたからである。第1章は、「異文化コミュニケーションの現場から」と題されていて、実際の通訳現場からいくつかのシーンを選び出して述べているところである。最後に、通訳者のしごとの特徴をまとめようとする中で、「必要なのは共感と好奇心」として（近藤、27-28ページ）、イラストレーターはここから「共感」をとりあげ、これをしゃべって英語で言ったものである。このイラストレーターは妻峯子（あとがきに明記）であるが、もちろん、私がこれを示唆したわけではまったくない。

著者Pinkは Empathy をすべて大文字で始めている。その説明として、次のように言っている。実にうまい定義だと思う。まさに以下にPinkのこのような感覚がよい通訳者には必要だと私は思っている。

「Empathy とは、だれか他の人の立場に自分を置くことを想像して、その人が何を感じているかを直感的に分かることだ。To stand in others' shoes ということ、その人たちの目で見ること、その人たちの心で感じることである。われわれがかなり spontaneous にすることで、意識的にそうしようと思つてするというより、本能的にする行為だ。しかし、Empathy は sympathy（同情）とは違う。同情というのは、だれか他の人のことをかわいそうだと感じること(feeling bad for someone else、イタリックは原著)だ。Empathyはだれか他の人といっしょになって感じること(feeling with someone else、イタリックは原著)だ。その人であつたらどんなふうを感じるかを感覚的に感じることで、大胆な想像力の行為、究極的な virtual reality だ。その人の心に入っていく、その視点から世界を体験することだ。」(Pink, p. 159)

さらにEmpathyの特徴として、いくつかの点を挙げる。たとえば、「Empathy とはその人と同じ気持ちになることが多いので、物まねの要因をもつことがある。あくびがうつるといのも、神経科学者 Steven Platek によれば、primitive empathic mechanism だという。あくびがうつる人は、Empathy の度合いを測るテストでいい点を出すという。

ただ、私は著者がこの章の最初に述べていることで、あくびをしたと何度も述べているのに対して、「読者は以上を読んで、あくびがついてしまったのではないか」としているのには適わなかった。私にとっては英語という外国語で読んでいて、面白かったので、つい夢中で読んでいて、あくびどころではなかった。私は右脳の働きが弱いかもしれないが、あくびがうつるとい現象にはもっと多くの要因がかかわっているのかもしれない。

さらにEmpathyはヒトが進化のぬかるみから抜け出すのを手伝ってくれたのだから、決定的に重要であり、その後、二本足で歩行するようになった今も、日々の生活をこなしていく上で重要であると著者は論じ進む。「このEmpathyのおかげで、議論の他の側面を見ることもこれで可能になるし、参っている人を慰め、嫌味や皮肉を言うかわりに一緒にべそをかいてあげることができる」(Pink, p. 160)。また、これまで一般的にはこのような態度はまったく評価されることがなく、実は厳しい決断が下されることが多い。「心優しい、あるいははてぬるい、ささいなこと」とみられるのである。クリントン大統領が「私は諸君の痛みを感じる」とつぶやいたときには、そう見せかけたただだと批判された。もっとひどかったのは、あれは大統領にふさわしくない失笑ものとか、男らしくないとか言われたことだと論じる。そしてこの時期が EQ (emotional quotient、感情指数)の重要性を論じたDaniel Goleman, *Working with Emotional Intelligence* (Bantam, 1998) が出

版された時期と重なり、これこそが右脳時代に突入した時期であったと論じる (Pink, pp. 160-161)。²

また、このような作業はコンピューターにはまだまだできないという。affective computing を行おうという最善の努力もこれまではたいした成果をおさめていない。顔を識別することもあまりうまくないが、そこに刻まれた微妙な表情を読むなどということはまったくできていない。「コンピューターはすごい数学的能力を持っているが、人との相互交流・やり取りということになると自閉症的だ」とも言われる (Pink, p. 164)。

しかも、一定の規則に整理してまとめられるようなタスクには Empathy はそれほど必要ないし、この種類の仕事はアメリカ、カナダ、イギリスなどから(アジアに)移ってしまう。しかし、それでも残る仕事は、これまでよりもはるかに深い人間同士のやり取りの微妙な理解を必要とする、という。これはまた、交渉時に交わされる話し合いで「明示的に示された単語の下を走るサブテキスト」(Pink, p. 165)を理解できなくてはならないとする。

「しかし、Empathyは21世紀の労働市場で生き残るための職業上のスキルなどというものよりはるかに大きなものだ。それは、生活のためのひとつの倫理(an ethic for living)である。他の人間を理解する手段であり、…国や文化より上の段階で人類を結びつける普遍言語である。Empathyこそ、われわれを人間にするもの、喜びをもたらすもの、意味の人生(life of meaning)を送るために必須のものである。」(Pink, p. 165)

これが著者のEmpathy論である。私が論じたよりもはるかに壮大な議論であり、はるかに雄弁である。これをどのように通訳論とかかわらせて論じることができるであろうか。

まず、もし通訳者が真に意味あるEmpathyをもってその職業の実践につけば、われわれの専門職は21世紀においても極めて重要かつ有望な職業たりうると言えるだろう。それは、「ちゃんとことばは訳した。文句あつか！」という態度で「通訳をしました」ということではなく、発言者がほんとうは伝えたいことを相手の言語で言いたいのにそれができないのをもどかしく感じている、そのもどかしさに共感し、それを感じとってあげる、発言者の感情まで読み取り(だから通訳は発言者の顔が見られないとできないと言われる)、そこから発言の意味をくんで、さらに、聴いている人の状況を把握したうえで、メッセージ(セレスコヴィッチのいう「意味」)を伝えようとするようなものでなくてはなるまい。このような仕事をすれば、それはコンピューターにはまだまだ(あるいは本質的に、半永久的に)できないということであろう。それができないような通訳者には、コンピューターの合成する、prosodyのないような発話しかできない通訳者には、あまり将来はないということにもなるか。しかしこれは、当事者を目の前において、もしほんとうにそんなことができたのであればのことである。私が考える限り、そもそもそのように限られた「言語」だけの置き換えによる「通訳」はちょっと想像がつかない。

また、弁護士や医者が、単なる情報を集めて判断するのではなく、面と向かって話していて、顧客の真のニーズを感じ取り、それに応じる訓練をしているという。通訳者の訓練にもそのようなカリキュラムが案出されてもよいかもしれない。

それには、Empathyの度合いを測るテストがあるというから、これについてさらに研究して、ひょっとしたら、まず通訳訓練をする大学院の入学試験の一部として、これを応用することができるかもしれないし、その後の訓練課程においても、これを活かせるかもしれない。

² 脳の研究をしている篠塚勝正氏から、今では、EQの時代から、PQ(prefrontal quotient)に移っていると教えられた。この前頭連合野(prefrontal cortex)は、困難などに直面した際に、もっとも状況に適した行動を導きだすために使われる知性で、優れた意味で賢い人、(情報・知識でなくて)知恵のある人はこの前頭連合野の働きが優れていると考えられているという。これを測るのがPQである。

もうひとつ重要なことがある。恥ずかしいことに、このエッセイを書いていてこのことに気がついた。それは、拙著で「通訳者は価値自由という社会科学上の方法論を実践している」と書いた(近藤、同上書、157-160ページ)ことについて、それこそまさにこの著者 Pink のいう Empathy ではないかということである。もしそうだとすれば、ちゃんとした通訳をしているということ自体が Empathy を実践していることになる。それならば、そもそも Empathy を伴わない通訳なんてできない、右脳を大いに活用していることになる。

まとめに代えて

著者は、左脳志向が必要なことは否定しないが、新しい時代にはそれを右脳志向で補足する(to supplement)ことが重要だという。そして、右脳志向がもっている5つの要因を挙げ、それが、design, story, symphony, empathy, play, meaning だと言う。

ここまで、左脳・右脳の機能の見直しを紹介し、さらに右脳志向の要因のうちの Empathy についてくわしく著者のいうところをたどってきた。つづいてこれを、通訳作業・通訳職という私の関心のあるところから検討してきて、「なるほど」とうなずける点や、考えていたことを補強してくれるところがいくつかあった。

最後に、いくつかの疑義を提起し、この稿を終えたい。情報時代においても、アメリカは今でも農業大国であり、いくつかの主導産業においてはその地位を他国に譲ろうとはしていない(オバマ大統領はあくまで自動車産業は守るという意志をあからさまに示した)などの論点は、本書との関連でも論じられてよいのであろうが、ここでは横に置いておこう。ここでは、右脳志向の5つの要因の間の相互関係(とくに、その Empathy と Play との間の相互補完ということ)について、さらに著者の論拠には暗黙の前提があるのではないかということについて論じたい。

まず、5つの要因について論じるところを読み進むと、Play という節がある。「遊び心」のことである。インドで始まった笑いクラブ(laughter clubs)の紹介から説き起こし、Play 重視の態度を、'sober seriousness as a measure of ability' から離れ、'the elevation of the next essential high-concept, high-touch aptitude: Play' (Pink, p. 186) だとする。心から楽しんで笑う真の笑いと、偽の笑い、相手のことを皮肉ったり、あざ笑ったり、馬鹿にして笑う場合との間には、顔の表情にはっきりとした違いがあり、このための訓練をうければだれでもこれを見破ることができるようになるとも言う。顔の表情を世界中で研究した Paul Ekman によれば、人間には7つの感情とそれに対応する人類普遍の笑い³があるという。

Play について私が「うーん、どうかなあ？」と考え始めるのは、それが職場にも持ち込まれてしかるべきだとし、Henry Ford の主張を左脳志向だとして退ける時点においてである。著者は次のような発言を引く。

「1940年のこと、ジョン・ギャット(John Gallo)は『にこにこしていた』かどで首になった。その前に、『仲間と笑っていて』、『アセンブリー・ラインをおそらく5分くらい遅らせてしまった』という違反を犯していた。厳しい経営上の規律は、ヘンリー・フォードの哲学を反映したものであった。フォード曰く、『仕事をしているときは仕事をすべきだ。遊んでいるときは遊ぶべきだ。このふたつを混ぜようとする(mixing the two)なんて、してはならない』と。(Pink, p. 187, from David L. Collinson, "Managing Humor," *Journal of Management Studies*, May 2002)

³ ラフカディオ・ハーンは、日本には courageous smile (「凛とした微笑み」と訳されている)があるとしたことがある。自動車事故にあって死んだ息子のことを報告に来た母親が、この微笑みを浮かべながら報告したというのである。この母親は悲しみをこの微笑みで表わしていた。また、芥川龍之介の短編「ハンカチ」ではこれを、顔で笑って、膝においた手の中で震えているハンカチで悲しみを表現していた。このような smile を Ekman はどのように解釈するのであろうか。顔の表情は普遍的と言えるのであろうか。

これはフォード自動車会社のリヴァー・ルージュ工場で起きたことであるという。本書の著者Pinkはこのような職場における規律を情報時代のものとして退けている。

しかし私はここにひとつ問題が潜んでいると思う。ここからは、5分でも仕事を送らせてしまうことを「5分くらいいいではないか」というところか、「たった5分だよ。そう仕事、仕事と言うな」という著者の声が聞こえてくるような気がする。しかしもしそうだとすれば、これはまずEmpathyと矛盾することが大いに考えられる。ここで数人の労働者が「遊び心」をもって仕事をしたために、この工場のラインが遅れることで、周りに迷惑をこうむる者がいるだろう。

もしこの5分の遅れでラインが5分間、止まってしまったということならば、経営者だけでなく、工場長はすっ飛んでくるだろうし、同じラインに張り付いて仕事をしている仲間もびっくりするであろう。あるいは、その5分間はライン上の自動車に付くべき部品が付かないままに通って行ってしまったということであったとしたら、どうなるであろうか。タイヤを車軸にとりつけるボルトが8本なくてはならないところが、5本しか付かないまま、市場に出てしまうのであろうか。もしそうなれば、これは消費者がとんでもない迷惑をうける可能性がある。かつてアメリカで、「月曜日と金曜日に工場からでくる車は買うな」と言われたことがある。なぜか。月曜日は労働者が二日酔いで出てくる、金曜日は無断欠勤が多い、ともに、欠陥車を作ってしまう、というのである。これでは事故を起こしてしまう。それでは、仕事を「遊び心」をもってすることは、こういう人たちに對してEmpathyを感じているとは言えないのではないか。この被害をこうむる人たちにEmpathyを感じて、その人たちの身になって考えたら、そんなことはできるのか。

もっと卑近な例をだせば、大学で講義をしていて経験することがある。100人以上の学生を対象にする講義では、しばらくすると雑談をする学生が出てくる。これは周りの学生がとても嫌がることだというのが分かっているのだから、注意をする。その時、「諸君の仲間が迷惑しているんだから、話を聞いてくれないかなあ」と言う(この1学期間に2度ほど、教室を出ていったもらったことがある)。しかし、彼らにとってみれば、これはいわばPlay 感覚で授業を受けるということになるのではないか。アSEMBリー・ラインがとまるのとおなじではないのか。この雑談を奨励していいのか。彼らにEmpathyがあれば、仲間に迷惑のかかる雑談はすることはないだろうと考えられるが、どうであろうか。

つまり、EmpathyとPlayは両立しないのではないかとということである。このふたつを、Don't mix! と言ったヘンリー・フォードを筆者のPinkがからかっているとしたら、たいへんな結果を(unwittinglyに?) 助長していることにならないか。

少し想像をたくましくすれば、さらにいろんなことが考えられる。遊び心たっぷり仕事をすれば、電車は時間通りにやっこない、店は開店時間になっても開かない、注文したものは約束の日に届かない…。このような事態は、多くの海外赴任者が体験している。こうなってもいいのか。もっと先を考えるのも、昨今の日本をみれば、そんなに難しくはない。『偽装国家』という本のはじめに、この類の例がこれでもかこれでもかと言わんばかりと出ている。高校で単位を偽装して卒業する、自動車会社にリコール偽装をしているところがある、湯沸かし器もあぶないなどである。このほかにも、クレーンがひっくり返ってけがをする人もいれば、家の2階がつぶされたということもあった。そして、大丈夫なはずのビルが震度5の地震で倒壊することもあるらしい。

ただ、こうした事件・事故とは別に、労働者がいい加減にしていたために起きたものではなく、経営者が、悪いことを百も承知の上で、意図的に古い原料を使わせたりする企業の不祥事がある。ロシアのことわざ「魚は頭から腐る」というのがあるということ、住友商事の岡会長の大東文化大学における特別講演で聞いた。こうした不祥事について論じるとき、このふたつの、性格の違う範疇をごっちゃにして(mix?) はいけない。

著者Pinkが、こうした社会機能が麻痺するまでの事態を想定していないとすれば、彼はあることを無意

識のうちに前提としていると思わざるをえない。それは、人がいくら「遊び心」を仕事の場で発揮しても、基本的なところでは左脳志向は必ず貫かれている(あるいは、いるはずだ)ということである。彼が労働の倫理と呼んでいるものはびくともしない(はずだ)と思い込んでいるということである。

ここで労働の倫理と言っているのは、マックス・ウェーバーが『プロテスタントの倫理と資本主義の精神』で「禁欲のエートス」と呼んだものを指していると考えられる。正確な言い換えとは言えないが、英語でこの逆の言い換えがよく行われるからである。ウェーバーの言った「資本主義の精神＝禁欲のエートス」は、平たく言えば、ものごとをちゃらんぼらんにししない、やるべきことは手抜きをせずにちゃんとやるということである。ウェーバーは、この態度が特殊近代的な資本主義(どこにもいつでもある金儲け主義としての資本主義ではない)が人類史上初めてイギリスで生まれるうえでこれを大いに助けたと論じた。しかし、この態度が今なくなれば、社会の機能は停止する。ウェーバーは、「いったん近代資本主義が成立すると、それが鉄の檻となって、人間を規律ある行動に閉じ込める」と論じた。制度が人に規律を押し付けるのである。規律を必要なものとする者は、この鉄の檻の一部と化して、その中の市民を監視する役をしているだけなのかもしれない。しかし、それがなくなれば、多くの人が迷惑をこうむり、不快に思うようになる。Empathyをもって、この人たちの身になって考えるならば、規律はなくせないことにならないか。

ひょっとしたら、北米やイギリスではこのエートスがなくなっていないこと、「遊び心」によってもなんら damage を受けないということを前提とできるかもしれない。⁴ しかし、折に触れて著者の言及する日本では、まさにこれを前提とすることはできない、あるいはできなくなりつつあることを、われわれは目の当たりにしている。そのようなところで「遊び心」を大いに労働の場に持ち込むべきだとはそう気安くは言えまい。そして、著者はこれを無意識のうちに前提とできる環境の中でこの論をなしていることを知るべきではないのか。

実はPinkにこの危険のことを分かっているわけではないわけではない。「仕事と遊びは、toxic combinationだ、このふたつを隔離しないと、それぞれが感染をうけて、その毒で死んでしまうとフォードは考えた」(Pink, p. 187)とまで述べているからである。それでもなお、現実はこのふたつが重要になりつつあると論じる。comingling work and play' がより一般的になり、より必要なことがわかってきているという(Pink, p. 187)。これが企業の戦略になっているところさえ出てきていて、Southwest Airlines の例が出ている。とてもいい成績をあげているこの航空会社では、そのミッションとして、「それを楽しんでしない限り、人はなにをしても、めったに成功しない(People rarely succeed at anything unless they are having fun doing it.)」というのである。「これこそ、フォードの managed joylessnessと180度違うものである。労働の倫理を遊びの倫理で補完して (supplementing the work ethic with a Play ethic) いるのは、ただおどけたアメリカの企業1社ではない。The Wall Street Journal によれば、ヨーロッパでも50社以上が Serious Play のコンサルタントを入れるようになった。これにはノキア、ダイムラー・クライスラー、アルカテル社などが入る。レゴ・ブロックを使って経営者の訓練をするテクニックをつかっている」(Pink, pp. 187-188, from Diya Gullapalli, “To Do:

⁴ 福祉国家デンマークにも新自由主義の波は押し寄せてきているようで、ここでは、必要な社会サービスは国家が責任をもって提供するが、そのサービスを実際に市民の手に届けるのは民間企業になっていて、どの企業がこれをするかを定めるためには入札を言う。あるデンマーク出身の専門家からこれを聞いた私は、「それでは談合は起きないのか」と思わず聞いてしまった。これに対して彼は、談合は起きていないという。そのわけを尋ねると、これには二つの要因があるとして、ひとつは「談合が行われたら必ず摘発される」こと、もうひとつはなんと、「デンマークには今でもプロテスタントの倫理がある」ことだと彼の方から明言した。隣人のためになるもの(サービスを含めて)を手抜きをせずに生産して届けるのは隣人愛で、これを実践することを天命(calling)だと心得る倫理がいまでも生きていれば、談合は発生しまい。日本にはこのような精神は、企業の社会的責任は400年も昔からあったとする岡会長の主張にも関わらず、欠如しているとせざるをえまい。

Schedule Meeting, Play with Legos,” *Wall Street Journal*, August 16, 2002)。英国航空では、「もっとfunの感覚を吹き込むために社の道化師(‘corporate jester’)まで導入した」(Pink, pp. 188-189) という。

それで会社の業績は上がっているとしたら、遊び心がアセンブリー・ラインを止めてしまうとか、欠陥車を作ってしまうような状況には陥っていないことになる。私は上で、へたに仕事に遊び心をmixすれば、ひどい状況になる、Empathy をもった者がすることではないだろうと論じた。この違いをどう解釈したらよいのであろうか。

著者のPinkは、このPlayというものを「遊び心」というより、もう少し広くとらえているし、この章のなかですくなくともふたつの性格の異なる事柄を論じている。あるいは、その概念があいまいだとすべきかのかもしれない。そして実際にPlayが次から次へと他のいろいろの表現に言い換えられている。たとえば、humor、joyfulness、unconditional laughter、having fun などである。この中には労働の倫理(禁欲のエートス)とmixしてもいいもの、なんの被害も与えずにmixできるものもあれば、mixしてしまえば労働の倫理自体が崩れてしまうというものも、ごったになったまま入っている。また、こんなことばもコラムで紹介されている——「playの反対は労働ではない。playの反対は鬱である。遊ぶこととは、act outすること、そしてwillful, exultant and committed as if one is assured of one’s prospectsだ」と (Pink, p. 187, Brian Sutton-Smith のことば)。Humorはlaughter と言い換えられていて、「笑いは社会的な活動である」とされ、さらに、「regular, satisfying connections to other peopleをもった人は、より健康で、happyだともする。つまり、humor をもった人は、よい付き合いのできる人とほぼ同義ととらえられている。極端な場合、’...today a play ethic can strengthen and ennoble the work ethic.’ (Pink, p. 204) ともする。つまり、「遊び心」があっても、これが労働の倫理のじゃまをするものどころか、それを高める、高尚なものにする、品性を高めるものだとされている。

また、ビデオ・ゲームは、これが学習機器になっていること、これによって生産性・効率があがるようになることなどが論じられている。それなら、Play自体に価値があるのではなくて、Playに実利があるからこそ価値があるのだということになる。どのような仕事では遊び心を導入してはいけないのか、どのような仕事では遊び心を導入したらいい効果が得られるのかを、峻別して論じるべきなのかもしれない。自動車産業はアメリカが守るとしていても、やはり産業時代のものである。このような産業がある限り、21世紀でも規律は必要なのではあるまいか。芸術家の集まった工房、書籍の表紙のデザインを創るところなどでは、Playは能率をあげるかもしれない。

しかもPinkは同時に、ビデオ・ゲームをすること自体が「遊び心」の一部、つまりこれをするのがそもそもPlayなのだということが示されている。しかも同時に、これが今では大きなビジネスになっていることまでが同じようにPlayの必要性を論じる論拠として挙げられている。どちらにしろPlayは必要なのだと言っているのだと論じることはできようが、私のように(おそらく)左脳の勝った者にはどうもこのような論理展開は杜撰だという印象をもってしまふ。

しかし、もし私が右脳志向型人間でこの本を読むとしたらどう読んでいるのだろうか、と考えている。

.....

【著者紹介】

近藤正臣(KONDO Masaomi) 大東文化大学教授。元日本通訳翻訳学会会長。元AIIC会員。